

2023年2月5日（日）主日朝礼拝説教

『ぶどう酒に変わった水』井上隆晶牧師  
列王記下2章19～22節、ヨハネ福音書2章1～12節

### ①【神のしるしが現れるためには信仰が必要であること】

カナで婚礼があり、イエス様と弟子たちは宴会に招かれました。当時の披露宴は七日間続きます。その最中にぶどう酒がなくなっていました。母マリアはイエス様に「ぶどう酒がなくなりました」と相談します。婚宴はマリアの親戚のものであり、彼女は接待役だったことが分かります。それに対してイエス様は「婦人よ、わたしとどんな関わりがあるのですか。わたしの時はまだ来ていません」（4節）と答えられます。とても冷たい言い方に聞こえますが「お母様、あなたはどうかお考えであれ、私には私の考えがあります」という意味です。「わたしの時はまだ来ていません」とは先週お話しをした、神様がその栄光の姿や力を現される神の時のことです。彼女は召し使いたちを呼んで「この人が何か言いつけたら、そのとおりにしてください」（5節）と言い、ぶどう酒を買いに行かせることも、宴会の世話役に相談することもせず、この問題をイエス様に委ねて待ちました。もし彼女がぶどう酒を買いに行かせて問題を解決しようとしたなら、私たちはキリストの驚くべきしるしを見ることは出来なかったでしょう。これは「最初のしるし」（2：11）だと書かれています。英語では signs です。キリストが誰であるかを見せてくれるものです。神は誰にでも自分を現わしません。それにふさわしい心を用意した者に自分を現わします。

●預言者エリヤの弟子にエリシャという人がいました。彼は先生が天に上げられる前に「あなたの霊の二つの分を受け継がせて下さい」と願いました。先生の二つの霊的賜物を下さいと願ったのです。するとエリヤは「私があなたのもとから取り去られるのを見れば、願いはかなえられる。もし見なければ、願いはかなえられない。」（列王記下2：10）といました。「見る」ことが条件でした。そしてエリシャは見たので、エリヤの衣と共にその賜物を受け継ぎました。

太陽は光が強いので、それに耐えられる目を持たなければ見る事が出来ません。神の光も同じです。それに耐えられる心、信仰を用意しなければならぬのです。神を求めてもいない人に、奇跡を行っても無駄になりますし、聖なるものを犬に与えても噛みつかれるだけです。もし私たちがキリストに期待し、相応しい信仰と心を準備するなら、主は姿を現して下さるでしょう。

### ②【水を汲むような作業を繰り返さない】

宴会場にはユダヤ人が清めに用いる石の水甕がありました。ユダヤ人は、外から帰って食事をする前に必ず手を洗いました。それは衛生上の理由ではなく、宗教上の理由でした。彼らは外国人は汚れており、彼らが触った物も汚れると信じて

いました。外に行けば外国人が触った物に知らないで触るかもしれません。だから汚れたままの手で食事をする、自分も汚れると思っ込んでいたのです。そこでどの家にも、手を洗うための水を貯める水甕が置いてありました。それが六つあり、一つの甕は 80ℓ～120ℓが入るものでした。イエス様は召し使いたちに「水がめに水をいっぱい入れなさい。」と言うと、彼らは甕の縁まで水を満たしました。2 リットルのペットボトルだと、六つの甕で 240 本～360 本になります。井戸から汲むのですから何度も往復をしなければなりません。大変な重労働です。なぜイエス様は召し使いたちにこんな行動を命じられたのでしょうか。

●先日、精神科医の M 先生をお招きし、ヴァイオリンを聞き、心の病のお話をさせていただきました。私が旧統一協会からの救出活動をしていることを話すと、先生は、私に「洗脳の解き方を教えてほしい」と言われたので、次のような話をしました。昔ある方を説得しました。週三日通い、一回に 2～3 時間を話をしました。それを約二か月繰り返し、計 24 回ほど話をしました。それでもその人は統一協会をやめません。もう行くのが嫌になり、私は「これは親が悪い」と親のせいにする心が湧いてきました。親は牧師が無能であると思っていたと思います。皆が疲れ果て、限界を感じていました。ある日、もう話すことがなく雑談をして帰りました。すると母親から電話があり「娘が教祖の写真と経典をゴミ箱に捨てています。見に来てください。」というので早速行き、「どうして間違いだと分かったのですか？」と聞くと、それには答えず「この人はいつまで来るんだろう。自分たちは真の愛だ、と教えられていたが、この人のように出来ない。この人を動かしている神様に会いたくなつた」というのです。私はあっけにとられ、神様が動いたと思いました。誰も自分を誇れません。私たちはもう限界に来ていたからです。神がしたとしか思えませんでした。私は最初、少し話せば辞めるだろうと、自分の力で何とか出来ると思っていたのです。でも次第に語る事がなくなり、初めて本当に「神様助けて下さい」と祈りました。本人が変わる為ではなく、私が変わるのに二か月が必要だったのです。

この重労働がなければ神の業は現れなかったでしょう。労働は人間に磨きをかけ、人間を完成させるために必要なものです。33 年間の牧会生活を顧みて、まことに水を汲み続けるような生活でした。でもこれからも汲み続けなければなりません。

### ③【キリストの似姿に完成されるのが信仰生活の目的】

イエス様は「さあ、それをくんで宴会の世話役のところへ持って行きなさい」（2：8）と言うと、召し使いたちは水を運んで行きました。世話役はぶどう酒に変わった水の味見をし、「あなたは良いぶどう酒を今まで取って置かれました。」（10 節）と花婿を讃えました。これは世話役の口を借りた預言です。「良いぶどう酒」とは福音を表しています。聖書には、水がいつ、どのようにぶどう酒に変化したかは書かれていません。書かれていないということは、それは考えなくて良いということです。大切なことは人間の知らない所で、神様はすばらしい変容の業を行って下さるということです。

この物語は、この「水」とはあなたであり、あなたの労働とキリストの業によってあなたも「最上のぶどう酒」に変わることが出来るということを教えているのです。信仰生活の目的は何でしょう。「六」で思い出すのは、天地創造の六日間です。人間は第六の日に神の像（かたち）と似姿に創造されましたが、墮落して神から離れたので、神の像は残りましたが神の似姿を失ってしまいました。そこでこの失われた神の似姿を完成させるために、キリストは人となられたのです。神が人になったのは、人を神に似た者にするためです。故に私たちは、神の似姿（キリストの似姿）にまで成長しなければなりません。それが信仰生活の目的です。

●修道士はこう言っています。「私たちは一人残らず、神の像と似姿に従って再び創られるために、聖霊によって変容されるままになっている者なのです。私たちはみな、聖人となるために呼ばれた罪人なのです。」

この世は神が私たちに与えた修練の場です。様々な試練を通してどのような人間になるか（どんな実を結ぶか）が試されています。長生きにはあまり意味はありません。長生きすれば皆キリストの似姿になるわけではないのです。試練をなくすことを求めてはなりません。それは不可能です。そうではなく、試練を通して一生かけて、どれだけキリストに似た者になったか、どれだけキリストのように人を愛し、赦し、与えたかです。蟻の町で働いたゼノ修道士は「ゼノ死ぬ暇ない」といいました。暇などありません。この世の労働が終わっても、祈りは最後まで行うことが出来る労働です。私たちがキリストの似姿に変えるのは聖霊です。だから祈らなければなりません。

●第二次世界大戦の時、アウシュビッツ収容所で、一人の父親の身代わりになって死んだ、コルベ神父という人がいます。彼は長崎で宣教し、聖母の騎士会をつくり、ポーランドに戻った時にナチスに捕らえられ、収容所に送られました。『コルベ神父の霊的メモ』という本の中に、彼の黙想の言葉が載っています。

「今日がお前にとって最後の日になるかもしれない。今日が最後の日であるかのように生活せよ。」「祈りの伴わない美しい説教や活動は実りをもたらさない。活動に、説教にそして、著作において効果をもたらすのは頭でもペンでもなく、膝である。」「聖務日課をふさわしい態度と注意深さ、敬虔さをもって誦えよ。一節だけでも一つの靈魂を改心させることができるのだ。立派になされた聖務日課と礼拝は、教区全体を新生させることができる。」「聖セラフィノが偉大な聖人になったのは、彼が彼に嫌がらせばかりする者のために祈ったからだ。」「マクシミリアノよ、聖人になれ—他の人が聖人になれたのなら、何でお前がなれないことがあろう。人間であれ、クリスチャンであれ、修道者であれ。」

このような文章が繰り返し書かれています。日毎の反省と努力の積み重ねがあつて彼は、聖人コルベ神父になっていったのです。

教会には聖人たちがいなければなりません。キリストに似た人、キリストの香り

を放つ生きたキリストの証人が必要です。私たちもそのようになるように呼ばれたのです。それが最大の証しであり、伝道です。私たちが将来どのような人になるのか、まだ分かりませんが、少しでもキリストの香りを放つ人になりたいと思います。